

# 1. 曾々木と鈴屋の概要

鏡 味 治 也

- I. はじめに
- II. 曾々木の概要
- III. 鈴屋の概要
- IV. おわりに

## I. はじめに

金沢大学文学部文化人類学研究室では、2005年度の調査実習を輪島市町野町曾々木と鈴屋の2集落を対象に実施した。本報告書はその調査実習に参加した学部3年生と大学院修士1年生および教員が、おもにその際に得た資料にもとづき、それぞれの関心を持ったテーマについて分担執筆した各章から構成されており、当研究室の調査実習報告書としては21冊目のものとなる<sup>1)</sup>。

今年度の調査対象とした曾々木および鈴屋はいずれも輪島市町野町に位置するが、この町野町地区は1889（明治22）年から1940（昭和15）年までは鳳至郡町野村、1940年から輪島市に合併する1956（昭和31）年までは同町野町として単独の自治体を構成していた。地区内を貫通して能登半島随一の町野川が流れ、その流域には比較的まとまった平野が形成されて水田が広がり、河口には港が置かれて交通の要衝となっていた。隣接地区とのつながりも、輪島市街地を中心とする輪島地区よりは、町野川をさかのぼった柳田村やその先の能都町とのつながりが深く、町野河口の港は柳田方面からの木材の積出港として賑わったという。

町野川扇状地の付け根に位置する栗蔵（あわぐら）が地区の中心で、村・町役場や中学校が置かれ、商店が建ち並ぶ町並みを形成していた。鈴屋は栗蔵に隣接し、その町並みの一部と、そこから町野川支流の鈴屋川沿いの谷あいには点々と並ぶ家々で構成される集落であり、町並みの区域は菓子屋や理髪店など店での商売を、また谷沿いの家々は農林業を基盤としてきた。いっぽう曾々木は町野川河口の港から東へのびる海岸線に沿って形成され

た集落であり、観光業がさかんになる前は半農半漁の集落だった。

町野町が合併した輪島市も、その直前の 1954（昭和 29）年に輪島市街地を中心とする輪島町と近隣 6 か村が合併して市制に移行したばかりだった。当時の輪島町の人口は約 16,000 人で、それに対して町野町は全体で 6,500 人の人口を擁しており、対等とは言えないまでもかなり自足性の高い地域であったと言えよう。しかし合併後は、とくに曾々木から輪島市街地へ至る海岸沿いの県道が整備され、また漆器ブームなどで輪島の町が活況を呈するにつれ、町野町の住民の足も輪島に向かうようになり、人口の流出や生活圏の変化が見られるようになって現在に至っているという。

こうした町野町地区の置かれた状況の中で、本実習調査は曾々木と鈴屋のふたつの集落を取り上げて、そこでの住民の生活の変化と現況を聞き取りと観察をもとに調べることになった。本報告書はその成果報告になる。これまで同様、2005 年 7 月末から 8 月初めにかけて行った本調査では、参加学生はとくに自分の調査テーマを決めず、地域の生活の総体について幅広く聞き取っていく方法を用いた。本調査の終わりの段階で各学生にそれぞれ関心をもったテーマをあげさせ、以後はそれぞれの学生の関心にもとづいた補充調査を随時行った。本報告書はそうした学生各自のテーマをもとにした章構成をとっているため、全体として対象とした集落に関する調査内容を網羅するかたちにはなっていない。それを補足する意味で、まず本章では曾々木・鈴屋両集落の概要を提示したい。

## II. 曾々木の概要

曾々木は町野川河口右岸の海岸沿いの、岩倉山の山腹を背にした狭い平地に住居が建ち並ぶ集落である。かつては半農半漁の村であったが、1956（昭和 31）年に当時のベストセラー脚本家だった菊田一夫がシナリオを書いた映画のロケ地に使われ、その映画が放映されると同時に能登半島随一の観光名所となり、ホテルや民宿を開業するものが相次いで、宿泊施設を中心とする観光業が集落の重要な生業となって今日に至っている。

まず表 1 に 1965 年以降の曾々木の人口と世帯数の動態をあげる。

表 1 曾々木の人口・世帯数動態

	1965	1970	1975	1980	1985	1990	1995	2000	2005
人口	402	382	348	317	308	304	239	222	226
世帯数	100	113	110	99	85	85	77	88	82

出所：1965-2000 年の数値は国勢調査にもとづく『市町村地区別人口および世帯の概数』より、2005

年の数値は輪島市役所住民課の資料より

1965 年以降の 40 年間で曾々木の人口は半分近くに減っている。なかでも 1970 年から 1980 年にかけて 100 人近く減少し、80 年代は横ばいを保ったものの、90 年から 95 年にかけてさらに 70 人近く減り、その後横ばいが続いている。70 年代は減反政策の開始や輪島での漆器産業の盛況、また 90 年代前半はバブル崩壊後の経済不況による、仕事を求めている人口流出が考えられる。

いっぽう世帯数については、全体に漸減傾向にはあるものの、人口ほどの急激な減少は見られず、とくに 1985 年以降は比較的安定しているといえる。裏をかえせばそれは、世帯規模が小さくなっていることを物語っている。

次の表 2 には世帯類型を示した。港、新出地、下地というのは、曾々木集落を西から東に 3 つに分けた地区の名称である。核家族世帯は未婚の子供が 50 歳以上か以下で、単身世帯と夫婦世帯は 60 歳以上か以下でそれぞれ分けて分類した。拡大家族は 2 組以上の夫婦と未婚の子供からなる家族で、具体的には祖父母、父母および子供からなる 3 世代の直系家族が典型だが、祖父母のどちらかが欠けていたり、子供が不在であったり、稀に祖父母の兄弟姉妹が同居する家族もある。ここではそれらをまとめて表示したが、未婚の子供を欠く世帯はカッコ内に付記した。

表 2 曾々木の世帯類型

	港	新出地	下地	計
核家族（子供 50 歳以下）	10	2	2	14
核家族（子供 50 歳以上）	1	1	4	6
拡大家族（カッコ内は未婚の子を欠く）	7	7 (2)	7	21 (2)
単身（60 歳以下）	5	1	2	8
単身（60 歳以上）	7	2	4	13
夫婦（60 歳以下）	1	0	2	3
夫婦（60 歳以上）	8	5	4	17
計	39	18	25	82

出所：2005 年 6 月現在の住民票より

輪島市街地や柳田から能都町に通じる幹線道路、またバスターミナルにいちばん近い港地区に若い年齢構成の核家族が集中しているが、他の地区もこれと隣接しており、たまたま現時点での集計でそうなったようにも思える。全体に拡大家族が多く見られ、そのうち

未婚の子供を含む世帯が多数を占める。核家族世帯と合わせて、全体の 4 割の家庭に 50 歳以下の未婚の子供がいることになる。

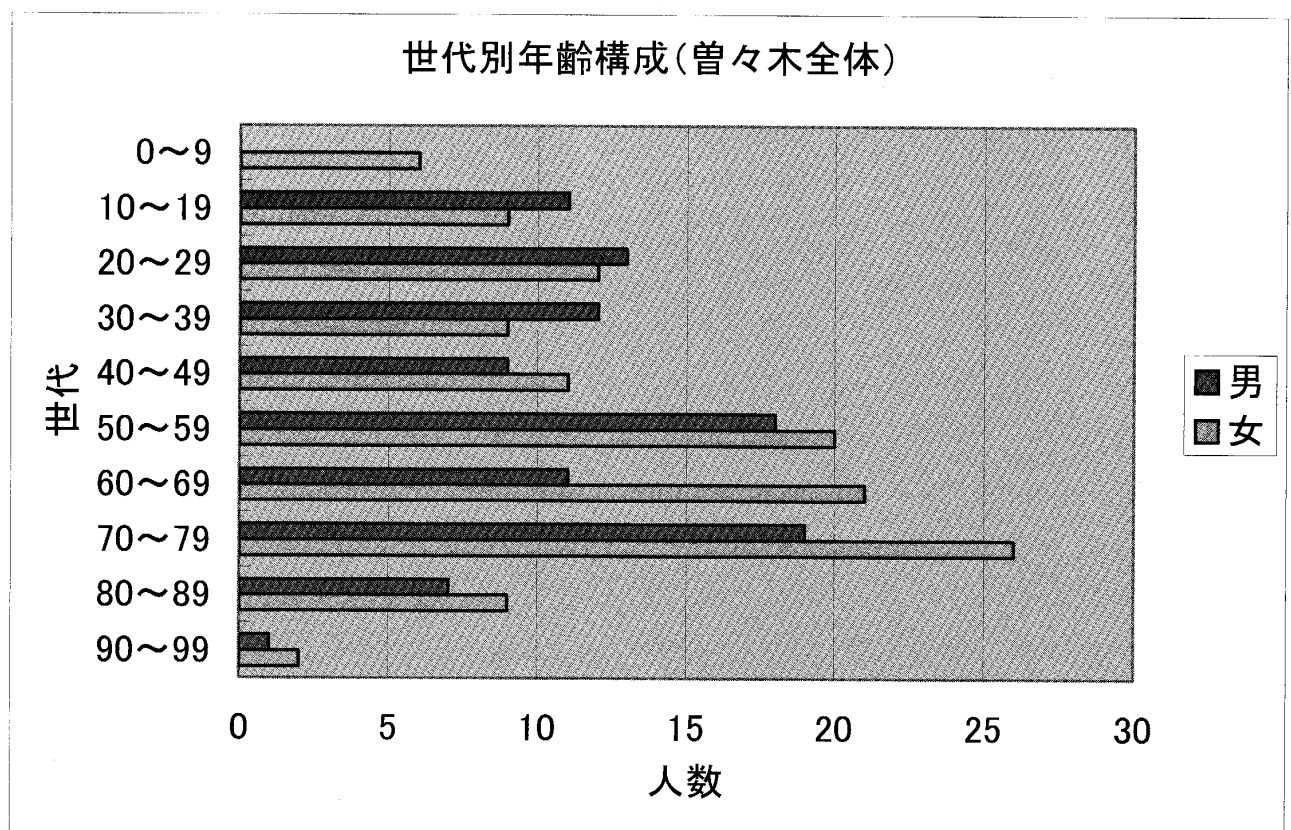
他方、構成員が高齢の核家族と単身および夫婦世帯を合わせると、全体の 4 割 5 分近くにおよぶ。拡大家族内の高齢者も含めて、集落人口の高齢化は顕著である。なお 60 歳以下の単身者のうち 6 人は、町内の工場に勤める下宿人である。

集落人口の高齢化は表 3 の年齢別人口構成でも見て取れる。

表 3 曾々木の年齢別人口構成

年齢	0~9	10~19	20~29	30~39	40~49	50~59	60~69	70~79	80~89	90~99	計
男	6	9	12	9	11	20	21	26	9	2	125
女	0	11	13	12	9	18	11	19	7	1	101
計	6	20	25	21	20	38	32	45	16	3	226

出所：2005 年 6 月現在の住民票より



能登の農村部の集落としては、若年層人口を比較的好くかかえている方だと言えるが、50 歳以上の人口に比べて、30~40 代の人口が少ないのが表およびグラフから読み取れる。

先の表 1 では 1965 年からの数値しかあげられなかったが、曾々木ではその前の 1955 年

頃を境に生業の大きな転換があった。それまではイワシ漁を主とする漁業と製塩業に農業を組み合わせた生活が一般だったが、ちょうどそのイワシがとれなくなったときに観光ブームが押し寄せ、旅館や民宿経営を中心とした観光業が多くの世帯の生計の中心になった。ただし観光業は春から秋までがシーズンで、冬は男たちは関西方面の大都市に出稼ぎに行くことが多かったという。

漁業および観光については後の章で詳述するので、ここでは農業について簡単に見てみる。表 4 は農業センサスをもとにした曾々木の農業の概要である。なお表中 1990 年以降のカッコ内の数値は販売農家数およびその経営耕地面積である。

表 4 曾々木の農業の概要

	1960	1970	1975	1980	1985	1990	1995	2000
農家数 (販売)	84	58	49	44	34	25 (9)	17 (11)	19 (9)
専業	11	1	-	1	1	1 (1)	1 (1)	(3)
1 種兼業	10	1	1	1	-	1 (1)	2 (2)	(1)
2 種兼業	63	56	48	42	33	23 (7)	14 (8)	(5)
経営田面積 (a)	1,448	1,220	905	923	858	688 (509)	687 (588)	623 (513)
経営畑面積 (a)	776	290	185	184	114	96 (26)	98 (76)	155 (66)
経営樹園面積 (a)		-	-	-	-	2 (2)	- (-)	4 (4)

出所：農業センサス農業集落カードより

1960 年時点では集落総戸数の 8 割が農家として登録していたが、その後急減し、2000 年現在では 2 割にあたる 19 戸のみである。また 1960 年に合わせて 21 戸あった専業・一  
種兼業農家も 70 年までにわずか 2 戸となり、ほぼそのまま現在に至っている。2 種兼業農  
家も減り続け、しかもそのうちの半分は非販売農家である。2000 年の統計では販売農家数  
の数のみが記載されている。兼業先のデータは表 4 には載せなかったが、自営業が 1960  
年から現在まで大半を占め、ついで日雇いや出稼ぎが 75 年までは多かったが以後減少し、

かわって恒常的勤務が自営業に次いで多くなっている。

経営耕地面積も 1990 年まで減少し続け、その後横ばいとなっている。とりわけ 1960 年から 70 年にかけての畑の面積の減少が目立つ。その背景には宅地や商業地、あるいは地区内に新設された高校の敷地への転用が考えられる。

表には載せていないが、農家当たりの経営耕地面積は 1980 年まで 1 ヘクタールを超えるものはおらず、30 アール未満が大半を占めていた。ただ、1990 年以降の販売農家については 1 ヘクタール以上の農家も 2 戸出現している。

年齢別農家人口も表には載せなかったが、1985 年までは 15-59 歳の人口で 6 割以上を占めていたのが、その後とくに 15-29 歳の人口が急減し、逆に 60 歳以上の人口が 30-59 歳のそれを上回るようになっていく。高齢化は農業部門でもはっきりと見て取れる。

以上概観したように、農業はもともと曾々木においては付随的な生業であったが、とくに 1970 年以降はますますその比重が小さくなっていると言える。それにかわって旅館や民宿をはじめとする観光業が生業の中心になったが、その観光業もかつての賑わいを取り戻せないままである。それ以外の職種としては、建設会社や自動車工場、食堂、コンビニ店や酒屋、理髪店などがそれぞれ若干見られるが、輪島や能都町方面への勤めが、とくに生計の中心になってきているというのが実態だろう。

### III. 鈴屋の概要

鈴屋は町野川の作る扇状地の付け根にある町野の中心地栗蔵の町並みの一画から、支流の鈴屋川沿いの谷間に沿って並ぶ家々で構成される集落である。曾々木と同じように、その町並みの一画が鈴屋町内と呼ばれ、谷沿いの方は鈴屋と呼ばれて区別されている。ただし家並みは現在では町内から谷筋に連続的に連なっている。

栗蔵の町並みにつながる鈴屋町内は、もともとは数軒しかなく、昭和になってからここで商売を始めるために移り住む人が増えて、今のような町並みになった地区だという。調査時点の戸主で 3 代目という家が 6 軒、2 代目が 4 軒、初代という家が 6 軒あり、その出身地も町野内の近在の集落のほかに、町野に隣接する輪島市南志見地区や柳田村、さらには金沢から移ってきた家もあった。栗蔵の町並みが町野町の中心としての吸引力を備えていたことを物語っている。その職種も理髪店や魚屋、豆腐屋、菓子店、呉服屋、洋品店、建具屋など店屋が多かったが、今ではやめてしまった店も多い。

いっぽう谷沿いの鈴屋の方は農林業中心の地区で、広い水田や山林を所有するオヤッサマが発言力を維持してきた面影を残している。こちらでは外からの移入世帯はあまり見ら

れない。

表 5 に 1965 年以降の鈴屋の人口と世帯数の動態をあげる。

表 5 鈴屋の人口・世帯数動態

	1965	1970	1975	1980	1985	1990	1995	2000	2005
人口	331	318	303	311	299	284	248	229	234
世帯数	83	79	78	80	78	77	76	76	79

出所：1965-2000 年の数値は国勢調査にもとづく『市町村地区別人口および世帯の概数』より、2005 年の数値は輪島市役所住民課の資料より

人口は 1965 年以降 2000 年までゆるやかに減少し、その後横ばいに転じている。曾々木のような特定の年代に特徴的な減少は見られない。世帯数は 65 年以降ほとんど横ばいの状態を維持しており、人口の減少を補うに一定数の移入世帯を継続的に受け入れてきたことを裏付けている。

しかし人口の減少と世帯数の維持から、やはり世帯規模の縮小は明らかである。表 6 は鈴屋と鈴屋町内に分けた世帯類型分類である。

表 6 鈴屋の世帯類型

	鈴屋	鈴屋町内	計
核家族（子供 50 歳以下）	6	6	12
核家族（子供 50 歳以上）	5	1	6
拡大家族（カッコ内は未婚の子を欠く）	16 (4)	11 (2)	27 (6)
単身（60 歳以下）	3	1	4
単身（60 歳以上）	4	7	11
夫婦（60 歳以下）	4	1	5
夫婦（60 歳以上）	10	4	14
計	48	31	79

出所：2005 年 6 月現在の住民票より

ここでは曾々木以上に拡大家族の突出が目立つ。これだけの拡大家族世帯を有していることが、人口減少をゆるやかなものに食い止めている要因のひとつであろう。しかしいっぽうで単身および夫婦世帯の割合も全体の 4 割以上と多く、とくに 60 歳以上の高齢世帯が

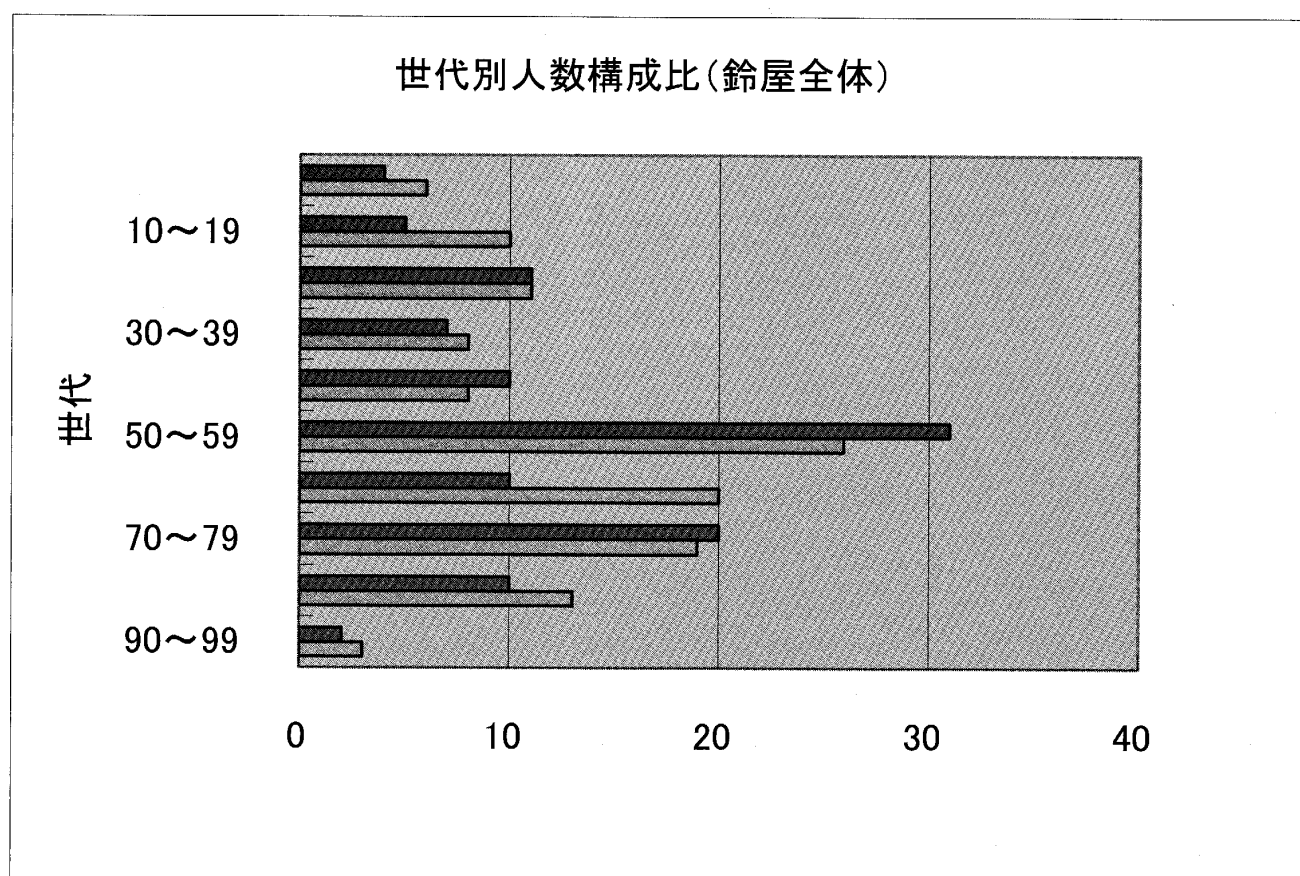
総戸数の3割以上になっている。これに子供が50歳以上の核家族世帯と、未婚の子供を欠く拡大家族世帯を加えると、総戸数の5割近くに及ぶ。世帯の高齢化は曾々木以上と言えよう。なお鈴屋と鈴屋町内の比較では、鈴屋町内で拡大家族の比率がより低く、また若い子供のいる核家族世帯や拡大家族世帯がやや多い割合で見られるが、高齢の単身および夫婦世帯は鈴屋町内にも多く、両者の差はそれほど顕著なものではない。

集落人口の高齢化は次の表7でも確認できる。

表7 鈴屋の年齢別人口構成

年齢	0~9	10~19	20~29	30~39	40~49	50~59	60~69	70~79	80~89	90~99	計
男	6	10	11	8	8	26	20	19	13	3	124
女	4	5	11	7	10	31	10	20	10	2	110
計	10	15	22	15	18	57	30	39	23	5	234

出所：2005年6月現在の住民票より



ここでも曾々木以上に50歳以上の人口の多さが目立ち、40代以下は各年齢層とも低い比率にとどまっている。しかしそれでも近隣のより過疎化が進んだ集落に比べれば、それで



も一定数の若年人口を抱えている方であろう。これも小中学校や保育所に近い地理的な環境が多少とも貢献しているものと思われる。

表 8 鈴屋の農業の概要

	1960	1970	1975	1980	1985	1990	1995	2000
農家数 (販売)	57	53	48	49	46	45 (41)	41 (37)	39 (36)
専業	1	-	-	-	1	2 (2)	1 (1)	(5)
1 種兼業	39	33	6	5	5	- (-)	10 (10)	(2)
2 種兼業	17	20	42	44	40	43 (39)	30 (26)	(29)
経営田面積 (a)	2,722	2,750	2,836	3,201	2,786	2,471 (2,395)	2,404 (2,329)	2,524 (2,457)
経営畑面積 (a)	786	620	317	291	147	94 (92)	127 (122)	59 (56)
経営樹園面積 (a)		150	-	11	17	10 (10)	- (-)	10 (10)

出所：農業センサス農業集落カードより

1960 年の時点で集落全戸数の 7 割以上が、2000 年でも 5 割以上が農家として登録されており、鈴屋のとくに谷あいの家々が農業を基本的生業としていることは明らかである。専業農家は 1960 年の時点で 1 軒しかなかったが、1 種兼業農家は 39 軒あり、70 年まではその規模を保った。しかしそれから急速に 2 種兼業化していったのは、おそらく減反政策の影響と思われる。それでも 2000 年に至るまで多くの農家が販売農家であり続けていることは、鈴屋における農業の重要性を物語っている。

耕地面積についても同様のことが言え、水田面積は 1960 年以来ほぼ横ばいと言っている状態を保っている。一方畑の方は 1970 年から 75 年にかけて半減し、その後漸減してきている。おそらく 2 種兼業化と連動した変化と思われるが、聞き取りでは確認していない。樹園は 70 年時点で一定面積が登録されているが、その後は小規模なものにとどまっている。

兼業先（兼業従事者の実数）と農家人口の年齢構成をさらに詳しく見たのが次の表 9 で

ある。

表 9 鈴屋農家の兼業先と年齢別農業人口

	1960	1970	1975	1980	1985	1990	1995	2000
主に恒常的勤務 (販売)	10	35	40	41	62	62 (56)	72 (65)	(47)
主に出稼ぎ	4	37	22	8	8	2 (2)	- (-)	(1)
主に日雇・臨時雇	41	28	35	44	28	25 (23)	10 (10)	(13)
自営権業	68	16	16	16	12	10 (9)	12 (12)	(3)
男 15～29 歳	69	22	21	20	10	5 (5)	9 (9)	10 (10)
男 30～59 歳		47	38	37	45	40 (36)	30 (27)	26 (25)
男 60 歳以上	16	16	19	20	20	20 (20)	24 (23)	24 (23)
女 15～29 歳	75	22	19	21	12	9 (9)	13 (13)	8 (8)
女 30～59 歳		52	45	41	40	37 (34)	32 (30)	23 (22)
女 60 歳以上	23	26	23	27	30	31 (27)	31 (26)	34 (31)

出所：農業センサス農業集落カードより

兼業先については、恒常的勤務につくものが着実に増加して、2000 年の段階で全体の 7 割以上を占めるようになってきているいっぽう、60 年時点で多かった自営兼業は 70 年までに激減し以後横ばいである。出稼ぎは 75 年以降下火になっている。日雇・臨時雇は当初自営権業に次いで多かったが、以後漸減し、2000 年にはかなり少なくなっている。

農家人口の年齢構成は、農業に従事するもの以外の家族構成員も含んだものであることに注意が必要だが、男女とも 29 歳以下が 80 年から 85 年にかけて半減し、また 30～59 歳の働き盛りもとくに男性の人口が 85 年以降目立って減少しているのに対して、60 歳以上

は着実に増加している。農家全体の人口が高齢化していることは明らかである。

水田の経営形態については、次の表 10 に見るように 0.5～1 ヘクタールを耕作する農家が多くを占めてきたが、その数自体は減ってきている。0.5 ヘクタール以下の農家と 1 ヘクタール以上の農家数は 1960 年以来それほど変動がない。農家数の減少は主に耕地面積が中規模の農家で生じたと言っていることができる。なお鈴屋では 1972 年から 73 年にかけて構造改善事業が実施され、30 アール区画の水田に整備された。そのことが 2 種兼業化を加速させたと考えられることもできよう。

表 10 鈴屋の経営耕地面積規模別農家数

	1960	1970	1975	1980	1985	1990	1995	2000
0.3ha 未満 (販売)	7	3	3	3	4	(-)	(-)	(-)
0.3～0.5ha	7	8	8	9	9	(15)	(14)	(13)
0.5～1.0ha	41	38	34	28	29	(22)	(19)	(18)
1.0～2.0ha	2	4	3	9	4	(4)	(3)	(4)
2.0～3.0ha		-	-	-	-	(-)	(1)	(1)

出所：農業センサス農業集落カードより

林業については 1970 年頃まで木材生産をしており、スギやアテを出荷していたという。近在の広江に製材所があり、そこに出すか、あるいは山師に売っていたそうだ。また 1960 年頃までは炭焼きも行われており、主に山の持ち主が自分の山に入って焼いていたという。その後は炭も木材も良い値段で売れなくなり、現在では山からの収入はないといっている。

#### IV. おわりに

以上、曾々木と鈴屋の概要を、人口・世帯数の動態と世帯類型、また生業の様子に焦点を置いて見てきた。曾々木は漁業から観光業、鈴屋は農林業と商店経営と、かつてはそれぞれ特色ある生業をもった集落であったが、曾々木を訪れる観光客の数は減り、鈴屋の農

業も2種兼業化が進み、鈴屋町内の商店街もかつてのにぎわいは失われて、それぞれの特色は弱まりつつあるのが現状である。しかしそのなかでも、それぞれの地区の伝統に根ざした活動の継承や、新たな活動の試みが活発に行われていることは、以下の章でお読みいただくとおりである。

短い本調査期間とその後の散発的な補充調査で得られたデータは限られたものであり、お話をうかがう機会のなかった方も多い。なにより学生の実習ということで調べる側の未熟さと言うまでもなく、本報告書の記述にも分析にも不正確、不十分な点が多々あるものと自覚している。関係各位の忌憚のないご批判、ご叱正をお願いする次第である。

## 注

<sup>1)</sup> 既刊の調査実習報告書の一覧は、巻末の「参考文献・参考資料」に掲げておいた。